岐阜市立女子短期大学研究紀要第 68 輯（平成 31 年 3 月）

祭司（プリースト）からシャーマンへ

沖縄・伊良部島佐良浜での事例

The Transition from Priest to Shaman
A Case of Sarahama, Irabu-Island in Okinawa

川上新二
Shinji KAWAKAMI

Abstract

Folk religious practitioners in Okinawa are divided into two types, priest and shaman. Noro (or Tukasanma) who performs rituals for the community is regarded as a priest. Those women of priests only pray to spirits, but spirits don't answer them. In response to personal requests, Yuta (or Munusunma), who makes fortune telling or prays to spirits of a household is regarded as a shaman. When they do something of seeing a spirit's figure or hearing a spirit's voice, spirits give them replays. In Miyako-Islands of Okinawa, religious practitioners, who have finished the term of Noro (Tukasanma) can play the role of Yuta (Munusunma). This article reports a case of such religious practitioners in Sarahama, Irabu-Island of Miyako-Islands.

Keywords : 伊良部島佐良浜、祭司（プリースト）、シャーマン、ツカサンマ、ムヌスンマ、

１．はじめに

周知のように、沖縄本島や奄美諸島を含む南西諸島での民俗宗教を代表する宗教者には、ノロやツカサなどとよばれる女性宗教者（以下ノロと称する）と、ユタやカンカカリャなどとよばれる女性宗教者（以下ユタと称する）とがいる。前者は集落の守護神を祀るウタキ（御嶽）などで行なわれる集落の祭事を担当し、後者は占いなどの個人的な依頼事に応じる。霊的存在とのかかわり方からみると、前者は神に祈願するのみで、神から応答を受けることはなく、後者は神霊の姿を見たり声を聞いたりして直接応答を受ける。以上のような特徴から先学は、前者を祭司（プリースト）に、後者をシャーマンに分類する〔櫻井 1987:195-230;佐々木幹宏 1980:143-144;1984:240-243〕。

他方、南西諸島のなかでも先島諸島に属する宮古群島で調査を行なった先学は、霊的存在から直接応答を受けたり、個人的な依頼事に応じたりするノロの存在を指摘している。すなわち宮古群島においてノロ（先学の報告では神役と表記されている）は、現在大部分の集落ではクジで選ばれるが、かつては神がかりの能力（先学によれば、神から与えられた指示を受けとる能力）を有することが枢要な条件とされており、したがって神霊と直接交流する面において、ユタ（先学の報告では巫者と表記されている）とノロの基本的な資質には何らの差異がない。それゆえ宮古群島では次のような状況がみられる。

まずノロのなかには、ユタの行なう個人の不幸や困難を解決するための占いを行なうことができる者がいる。ノロはこれを商売としては行なっておらず、実際に行なうことも少ないが、ユタたちと同じように、神に祈願するときに燃やす線香の煙のなかに神からの指示を見いだしたり、夢を通じて神からさまざまなお告げを受けとったりする。

またノロも頼まれれば、ユタの役割の一つである個人の家での神への祈願を行なうことがある。ただしノロを集落の祭事に専念させるため、ノロが個人の家での祈願を行なうことを規制している集落もある。しかし多くの集落ではノロを務める期間が定められており、その務めの期間を終えれば何ら問題なく個人の家での神への祈願を行なうことができる〔佐々木伸一 1983;1988〕。

先学が指摘する以上のようなことは、筆者が調査している宮古群島に属する伊良部島佐良浜においても見ることができる。佐良浜では集落の祭事を担当するノロに相当する女性宗教者はツカサンマとよばれ、一方、占いなどの個人的な依頼事に応じたり各家での神への祈願を依頼されたりする女性宗教者はムヌスンマなどとよばれる[1]。そしてツカサンマを経験した女性のなかには、先学が指摘するようにツカサンマとしての務めの期間を終えた後、霊的能力をつかって個人的な相談事に応えたり、個人の家での神への祈願を行なったりしている者がいる。本稿

[1] ムヌスンマの他に、ムヌスやカンニガイオバアなどともよばれるが〔川上 2016:19-21〕、本稿ではムヌスンマという呼称を使用し、必要に応じてカンニガイオバアという呼称も使用する。

ではこのようなツカサンマの任期を終えた後に個人的な相談事や各家での祈願に応じている宗教者の事例を、宗教者自身の語りを通じて報告する。

宮古島群島で活動する集落の祭事を担当する宗教者、および個人的な依頼事や家での祈願に応じる宗教者については、これまでも調査、研究がなされてきた[2]。一方、集落の祭事を担当する任期を終えた後に個人的な依頼事に応じている宗教者については、その存在は指摘されながらも具体的な事例報告はこれまであまり行なわれてこなかったと思われる。したがって本稿で報告する事例は、伊良部島佐良浜さらには宮古群島での民俗宗教を総体的にとらえるための資料になると考える。

２．事例

伊良部島佐良浜[3]で集落の祭事を担当する女性宗教者ツカサンマは6名で構成される。内訳はフンマ2名、カカランマ2名、ナカンマ2名である。位はフンマが一番上であり、カカランマは祭事で神に捧げる歌を唄う。ナカンマはフンマを補佐する。6名は佐良浜に居住する47歳から57歳までの女性のなかからクジで選ばれ、任期は3年である〔川上 2016〕[4]。

平成16年、17年、18年に佐良浜のカカランマを務めたAは、カカランマの役目を終えた後、個人的な相談事に霊的な能力をつかって応えたり、個人の家での神への祈願を行なったりしている[5]。本稿では A のライフヒストリーや体験について、彼女自身の語りを通じて紹介する。なおここで紹介するAの語りは、平成29年3月29日～3月31日および平成30年6月2日～6月5日に行なった聞き取り調査の際にAが語った内容を筆者が一人称の語りとして整理したものである。

(1) ツカサンマになる前の経験

幼い頃、私はある十字路でお化けがいたと泣いていたことがあると親から聞いた。子供の頃からいろいろなことが見えたり聞こえたりしていたが、誰かに話しても奇異の目で見られたりするので、人には話さないようにしていた。

20歳の頃、自分が誰かの家の門の前、向かって左側に立っている夢をよく見た。そのような夢を見はじめると、同じ家の門の前に立っている夢が一週間くらい続いた。当時はなぜ毎日このような夢を見るのかわからなかったが、夢が一週間ぐらい続くと、ある人が病気しているとか亡くなったとかいう話が周囲から聞こえてきた。そのような話を聞いた後にわかったことであるが、私が夢で見ていた家はまさにその病気や死亡した人の家であった。

私が20代のとき、母が47歳で亡くなった。当時は母が病気だともわからなかったが、母が亡くなる前、夢に母の墓がきれいに造られてあるのを見た。その墓の前には、すでに死亡していた身内の人々が来て座っていた。ある人が骨を入れた容器を持ってきて置いて、私に「ここでお祈りしなさい」と言った。母にこの夢の話をすると、母は「なぜかね、自分は死ぬのかね」などと心配していた。母は当時から身体の具合が悪かったと思う。

また次のような夢も見た。崖に道があって、その道をおりた一番下に棺桶が置いてあり、母がその上にいた。私が「いつまでそこにいるのか。先に上に行くよ」と母に言うと、母は「いいよ、自分はここにいるよ」と答えた。私は「知らないよ。もう上に行くからね」と言ってあがってきた。このような夢を見た後、母の身体は次第に弱くなっていき、ついにだめだった。白血病だった。

現在佐良浜のガソリンスタンドがある付近の海は、魚がたくさんやってくるオフサツ（豊かな海）である。私が20代だった頃、その海から神様が、私と親しい女性の産んだ赤ん坊を抱いて現れ、「あなたがこの子を助けるべきだから、受け取りなさい」と私に告げる夢を見た。神様は「受け取って助けなさい」と言ったが、私は「自分にはこの子はとても助けられない」と答えて、受け取らなかった。そのような夢を見た後、その赤ん坊の名前が書いてある紙を実際に見たとき、「死んだ人の名前が書いてある」などと口走って、「そのようなことは言うものではない」と家族から叱られた。その女性がその赤ん坊を私の家に連れてきたことがあった。とてもかわいい子だったが、私の家に来て帰った日の夜、死んでしまった。生まれてまだ7、8ヶ月だったと思う。このことが気になっていたので、2、3年前その女性に「悪いことをした。あの子は自分が助けるべき子で、神様が受け取れと言ったが、自分はまだカミゴト（神事。神にかかわること）も何もわからなかった頃で、自分ではどうすることもできないと思って受け取らなかった。今でもそれが悔やまれてならない」と告げた。すると女性は「その赤ん坊が死んだ後、ユタのところに行って姓名判断をしてもたったら、その子はここまでの命だったと言われたので、気にするな」と言ってくれた。

---

[2] 例えば、集落の祭事を担当する宗教者に関しては〔鎌田 1965a;1965b;1974〕、〔野口 1972〕、〔佐々木伸一 1983;1988〕など、個人的な依頼事に応じる宗教者に関しては〔岡本 1987〕、〔滝口 1991〕、〔饒平名 1973;1976〕などがある。

[3] 伊良部島佐良浜は宮古島市に属している。宮古島市役所市民生活課の資料によれば、平成29年12月末現在、宮古島市の人口は54,442人で、そのうち伊良部島の人口は5,213人である。佐良浜という地名は通称であり、佐良浜は行政区域としては池間添と前里添とにわかれる。池間添は人口1,023人、前里添は1,728人である。

[4] 平成28年以降はツカサンマを選ぶクジが行なわれておらず、ツカサンマは空席となっている〔川上 2017:48〕。

[5] ツカサンマのうちフンマを務めた者は、ツカサンマの期間が終わった後でも個人的な依頼事や家での神への祈願を行なってはならないとされる〔川上 2016:20〕。

このように若い頃から、いろいろなことが見えたり聞こえたりしていたが、それがどういうことなのか、わからなかった。20 歳代には、まだカミゴト（神事）について理解できなかった。

宮古島の平良で働いていたとき、よく当たるという 2 人のユタからそれぞれ「あなたはシマをもつ人（佐良浜の祭事を務める人）なのに、どうしてこのようなところで働いているのか」と言われた。そのユタたちとは、私が訪ねたのではなく、たまたま出会ったのであったが、私を見て「あなたはすごいものに守られている」と言った。私は「自分は再婚者だから（佐良浜の祭事を行なうツカサンマには）選ばれない」と言ったが、ユタたちは「違う。あなたにはシマ（佐良浜）の神がついているのだから、ナナムイ[6]を抱かなければいけない（佐良浜の守護神であるナナムイ（大主神社）の神を祀るツカサンマにならなければならない）」と言った。私は再婚者なのでツカサンマに選ばれないと思っていたが、夫が再婚者ではなかったので選ばれた。再婚者はツカサンマを選ぶ際には除かれると聞いていたが、再婚かどうかが問題になるのは夫の方であった。

ツカサンマになった後も、ある家の前を行ったり来たりする夢を一週間続けて見ることがあった。そのような夢を見た後には、誰々が亡くなったという話を聞いた。夢に見た家の人が亡くなったのである。

(2) 霊能を身につける

私はカンダーラ[7]になるところまではいかなかった。カンダーラになって、あちこち神に祈願をしてまわっている人もいるが、そのような人も早くカミゴト（神事）を理解して、神が示してくれることを自分で判断できるようになっていたら、カンダーラにはならずに自分で道をあけることができたであろう。私の場合はカミゴトについて教えてくれる人たちがまわりにいて、その人たちから習って自分で進んでいくことができたので、カンダーラになることはなかった。ツカサンマを務めたことがある人たちはある程度カミゴトについてわかるので、例えば「このような夢を見たがどういう意味か」とその人たちに尋ねれば、教えてくれる。私は納得がいくまで教えてもらう。そのようにしていたのでカンダーラで苦しむことはなく、自分でカミゴトを理解し、神が示してくれることが判断できるようになった。

私の身内にはカミゴトにかかわってきた人が何人かいて、カミゴトにかかわる家系のようである。ツカサンマを選ぶクジでは、そのようなカミゴトにかかわる家系の人が選ばれる。カミゴトに詳しい人から、私もそのような家系の者としてツカサンマに選ばれたと言われた。カミゴトとかかわりのない家の人も選ばれるが、実はそのような人のなかにも、もともと神とかかわる能力をもっている人がいて、ツカサンマに選ばれた後、同僚のツカサンマや以前ツカサンマを務めた人たちと話をしているうちに、自分にも神とかかわる能力があることがわかる場合がある。

ツカサンマが 6 人いれば、そのなかには昔の年寄りから話を聞いている人もいるので、集まって話をするとき「自分はこういう夢を見た、ああいう夢を見た」と言うと、わかっている人が「それはこういうことだ、ああいうことだ」と話してくれる。そのような話を参考にして、自分が見た夢を解釈していく。皆と話をしていると「ああ、そういうことなのだ」と自分で判断できるようになる。例えばナナムイ（大主神社）にあるオフユという砂山の夢を見たら、ツカサンマを務めたことのある先輩たちに尋ねて、先輩のなかのわかる人が「そういう時にはこういうことだ」と教えてくれる。

もともと神とかかわる能力をもっている人は、同僚のツカサンマやツカサンマを務めた者と話をしていると能力が強くなって、自分で判断できるようになる。反対に、神とかかわる能力をもっていても、カミゴトをしている人たちと付き合っていかないと自分の能力があらわれてこない。能力をもっている人でも、カミゴトをする人々から離れたりすると能力が減少していき、神からの知らせを見たり聞いたりしなくなる。

ツカサンマのなかにも、神と通じる人もいれば通じない人もいる。もともとカミゴトの能力をもっていない人は、同僚のツカサンマやツカサンマを務めた先輩たちと話しても神とかかわる能力が生じることはない。神と通じる能力のない人でもクジでツカサンマに選ばれるが、神と通じる能力のある人が 1 人か 2 人は必ず選ばれるはずである。私のオットンマ（後輩になるツカサンマおよびツカサンマ経験者）などは、神からの教えがわからない。私が「どのようなことがあったらこういうことだ、ああいうことだ」と教えても、「わからない」と言う。そのオットンマも夢などで神が示すことを見てはいるが、その意味が理解できないでいる。その人は南（伊良部島の南地区。佐良浜は

---

[6] 佐良浜の守り神であり、その神を祀っている聖域の名称でもある。大主神社ともいう〔伊良部村役場 1978:1284-1293;平良市史編さん委員会 1994:582-583〕。

[7] 沖縄本島や先島諸島のシャーマンであるユタが、ユタになる前に経験する心身の異常で、神からの召命のしるしとされる。カミダーリィやカンブリなどと称される〔佐々木 1980:99〕。佐良浜でのユタに相当する宗教者であるムヌスについて報告した饒平名は、ムヌスになる過程において「身体的に虚弱で夢にうかされたり、幻覚におそわれたりというようなことが経験される。(略) このように頻発する行動の期間が“カンブリ”であり、その期間に自分のチッヂ（崇べるカミ）を探すために先輩である“ムヌチー”のところに通い、(略) 崇べるカミ“チッヂ”が求められて一人の“ムヌスー”が誕生する。“カンブリ”は必ずしも若年期におこるということはないが、若年期からその兆候があり、人助けをするように要請される。当初は抵抗とためらいがあるが、カミの本人名ざしの脅迫や約束ごとによって勇気づけられて霊的職能をうけいれるとされる」と述べている〔饒平名 1976:420-421〕。

北地区になる）の人で佐良浜出身ではないから、考え方や見方が違うので理解の仕方も違っているのかもしれない。

ナナムイ（大主神社）にある砂山オフユは普段はきれいになっているが、時には誰かがわざと暴れたように崩れていて、穴もあいていることがある。私はこれを見て「誰かが苦しんでいるな」と考え、亡くなる人を当てたりもする。このようにどんなことがあっても、それを見て何のことか判断していかなくてはいけない。後輩のツカサンマにそのように教えたら、「自分などにはわからない」と言っていた。

(3) 家での祈願（ヤーキニガイ）

家での神への祈願（ヤーキニガイとよばれる）は、朝早くと言っても、夜が明けないと行なわない。もっと早い時間からする人もいるが、私は朝 6 時以後でないと行なわない。冬は朝 7 時くらいから行なう。

家での祈願を行なう人のなかには担当する家を 13 軒ももっていて、1 日に 4～5 軒まわる人もいるが、私はその家の人とゆっくり話もしたいので、そのように数多くは行なわない。1 軒で 2 時間半くらい費やす。祈願する時間は 45 分くらいであり、あとの時間はその家の人と世間話をして帰ってくるので、そのように多くの家で祈願をすることはできない。

祈願では線香の燃え方を見て「こうだよ、ああだよ」と、その家の人に話をする。線香の燃え方を見ると「どちらの方向からいいものが来る、お金とか何かが送られてくる、子供が生まれる、牛が生まれる、長いこと顔を見せなかった人が訪ねてくる」などということがわかる。「疎遠になっている人がわざわざ訪ねてくるので、家に入れてあげて、祖先のこととかマウカン[8]のこととか、させてあげなさい」などと伝える。線香の燃え方を見ていると、人の顔が現れてくることがある。それは亡くなった人や祖先などである。人の顔が線香の燃え方に現れると「誰々が来ている、何人来ている」ということをその家の人に伝える。

私は頼まれて家での祈願をするときには、悪いことはあまり言わない。悪いことは少なめに、いいことは多めに言う。頼まれて行なっているので、悪いことが出ても、いい方向にもっていくようにしている。ある家で年の初めの祈願をしたとき、線香の燃え方と煙のなびき方を見ると、煙がなびくのは緩やかであった。よいことがたくさんあるというようでもなかったが、「今年はそんなに悪い年ではない、緩やかによいことが起こる」と言ったら、その家の人も「ああよかった」と言っていた。

他のムヌスンマと一緒に家での祈願をするときもあるが、その人の祈願の仕方が私とまったく違うことがある。私は昔ながらのものを習って行なっているようである。去年ある家で 88 歳の祝いの祈願をしたとき、90 何歳かのおばあさんがいて、私に「あんたのニガイ（祈願）は昔ながらのニガイ（祈願）でよかった」と言っていた。

サトのウマ[9]をした人などとも一緒に家での祈願をすることがあるが、その場合でもその人の祈願の仕方が私とまったく違うことがある。線香の数え方も違うし、歌でも、お祝いの歌を唄うときになると、私に「自分はわからないから唄ってくれ」と言ってくる。2 人で祈願をするといっても、結局は私 1 人で行なわなくてはならなくなる。あっちこっちの家で祈願をしている人でも、歌はできないという人が多い。また、私は祈願をするときにはタバコユーというものから始めるが、タバコユーを行なわない人もいる。私のところに祈願の仕方を習いに来ている人も、「タバコユーをせずに家での祈願をやっている。これ（タバコユー）はカカランマを務めた人がやるもので、自分なんかがするものではない」と言っていた。

頼まれてある家で祈願をしたとき、その家の主婦は自分でも祈願ができると思っている人で、私が祈願している最中、私と一緒に座らないで 1 人で台所に行って祈願をしていた。普通その家の人は私と一緒に座って祈願をするが、この人は隠れて台所で自分の思うままに 1 人で何神様、何神様と唱えて祈願をしていた。私が祈願をしていると線香の表側は燃えないで、裏側だけがどんどん燃えるので「おかしい。誰か何かしているな」とわかった。普通、線香は少しずつ燃えていくが、そのときは裏側だけがぼんぼんと火があがって燃えた。そのような家は、次からは依頼があっても断る。「次からは自分でやりなさい」と伝える。このように自分では祈願できると思っているが、まわりからは「あの人は知らないくせに何でも知っているふりをする」と言われている人がいる。

佐良浜では現在でも祈願をする家が多い。家で行なう祈願の種類は多く、1 年間に 20 回ぐらいする家もある。モトムラ側で行なっている祈願のなかにはナカムラ側にはないものが多い[10]。私はモトムラの者であり、私が教わった人もモトムラ側の人であった。私が教わった人は年の初めの願い（ツツノハジメノニガイ。トシノハズマイノニガイともいう）、健康を祈る願い（ガ

---

[8] 各人の守り神。各家にはそれを祀る神棚がある〔川上 2016:21〕。

[9] 佐良浜内にはサト（里）とよばれる小規模な地域集団があり、住民は必ずと言っていいほど、いずれかのサトに所属している。サトにはサトに所属する住民の守り神サトガンを祀る場所があり、サトガンを祀る役目の女性もいる。そのような女性はダツンマとよばれる〔川上 2016:18-19〕。ダツンマも依頼されて家での祈願をすることがある。

[10] 佐良浜は行政区域としては池間添と前里添にわかれるが、行政区域とは別に、佐良浜はモトムラとナカムラという 2 つの「祭祀儀礼集団」〔伊良部村役場 1987:1402〕で構成されており、住民はモトムラかナカムラのどちらかに属している〔川上 2016:16〕。

ンジョウニガイ）、お礼の願い（レイズブン）の 3 つを行なったら十分と言っていた。それに加えるなら、日頃お茶を供えるマウカンへの願い（チャーシツニガイ）がある。その他、家に入ってくるお金が少ないと思ったら、豊かにしてくださいと祈る願い（オフユニガイ）を行ない、厄を祓う願い（ヤフバルニガイ）などもあり、家で行なわれる祈願はたくさんある。

私も家で行なう祈願は年の初めの願い、健康願い、お礼の願いの 3 つでよいと思っている。これらの祈願を行なうとき、依頼者の意向を聞いて、特別に祈願をしたい人や事柄があれば、それに関して別に線香を供えるというやり方で行なっている。このようにしないと、祈願の数はどんどん増える。

家で行なう年の初めの願いでは、最初にタバコをつけてから、「金庫のふたを開けて、元気な年で、お金持ちでもないけれど貧乏でもなく、オフユ（富）をたくさんくれるように」と唱えて、タバコユーの祈願から始める。このようなやり方で祈願を行う人は少ない。私は「自分は正統派だ」と言って祈願をしている。年の初めには、祈願を依頼してきた家のためにゴテンポーという歌を唄ってあげる。これはお祝いの歌で、ナナムイ（大主神社）でツカサンマが祈願をする際にも唄われ、70 歳になった人への祝いの席でも唄われる。これを聞くとうれし涙を流す人もいる。年の初めの願いや健康願いなど、家で行なう祈願は全体として 45 分から 1 時間ぐらい行なう。

特別に気にかかることがある場合は、そのための祈願を別途行なう。私は、家を離れて暮らしている子供が家にやってきて、2 階からダダダッとおりて外に出て、また 2 階にあがってダダダッとおりてくるのを繰り返すので、その子に「ここにきて落ち着いて座ってごらん」と告げる夢を見たことがあった。夢から覚めた後、「これは何か祈願をしなくてはいけない」と思い、子供にも連絡して、祈願を行なったことがある。

また、墓に飾る花を持って走りまわっている人の夢を見たこともある。気になったので、その人の家で元気になる祈願（健康願い、ガンジョウニガイ）を行なってあげた。その人は車を運転していたとき、どのタイヤかまでは聞いていないが、タイヤに不具合が生じて危なかった経験をしたということである。その人の家の者は魂（タマス）をつける祈願（タマスツケニガイ。身体から遊離した魂を戻して、身体につけるための祈願）をした方がよいのではないかと言ったが、私は「自分は魂をつける祈願（タマスツケニガイ）などできないから、他の人に頼みなさい。私は元気を取り戻すために健康を祈る願い（ガンジョウニガイ）をしようとしているのだから、いちいち魂をつける祈願はしなくてもいい」と言った。すると、その家の人は「あなたに任せる」と言った。健康を祈る祈願をした後、その人といつも一緒に歩きまわっている人が死んだ。災いは誰に引き継がれるかわからない。

ツカサンマを務めていたとき、ナナムイ（大主神社）に「私は 70 歳になったら家での祈願（ヤーキニガイ）をする」と報告していた。60 歳をこえて 70 歳に近づいたので、もういい頃かと思って家での祈願を始めた。始めるには今の年齢がいい頃だと思う。あまり年をとると祈願をするのも大変で、楽ではない。

(4) 死者への儀礼

亡くなった人にはハツナンカ、フタナンカ、ミナンカと一週間ごとに祈願をする。亡くなった人には一週間ごとにお供えをして、最後は 49 日目になる。ハツナンカに線香を 7 本立て、その後 7 日ごとに 7 本ずつ増やしていき、49 日には線香が 49 本になる。亡くなった人への祈願の線香は 7 本が基本で、7 回行なうと 49 本になる。健康とか良いことのために家で行なう祈願の線香は 12 本が基本で、それら以外のものは 9 本が基本になる。私はこのように教わった。

亡くなった人への祈願を習いたいという人もいる。私も、やるというならやるが、普通は亡くなった人のことは行なわない。行なったとしても、私は 3 回忌で終ろうと思っている。佐良浜を離れて他の場所に移っている人も多いので、集まるのも難儀であろうから。

私のオバさんが亡くなったとき、亡くなった人にはどのようなやり方で祈願をするのか知りたいと思って、その家に行ってやり方を見ていたことがある。オバさんもナナムイを抱いていた（ツカサンマであった）。このときには、シマ（佐良浜）の生まれであるが、現在那覇に住んでいるというユタがよばれてきて祈願をした。どのようにするのか見ていたが、あまりにおかしいものだから、私は裏の方に行って笑っていた。なぜ笑っていたかというと、その家では、そのユタに頼んで 49 日まで 7 回祈願をしたが、ユタが毎回同じようにオバさんの言葉として、オジさん（オバさんの夫）を恨んで死んだということを話すので[11]、私は「また同じことを言っている。馬鹿じゃないのか、この人は」と思いながら聞いて、おかしいので笑っていた。ユタは、亡くなったオバさんの言葉として「あんた（夫）は酒を飲んで帰ってきては自分を叩いて、ああしたこうした」ということを毎回話していた。ユタが話すのを聞きながら、「なぜそのようなことを言うのか」とオジさんが 1 人で怒っていた。

私が笑ったのは、そのユタがさらに祈願の依頼を受けて儲けようとしているのだと思ったからである。ユタやムヌスンマを通じて神や死者が悪いこと、恨みごとを語ると、それを解消するためにあらためて神や死者に祈願をしなければならない。そのため、またユタ（ムヌスンマ）に祈願を頼む。神や死者の恨みごとを語ることによって、ユタ（ムヌスンマ）はさらに祈願

[11] ユタ（佐良浜ではムヌスンマ）は死者への祈願をする際、死者の思いを死者に代わって語る〔川上 2016:19-20〕。

の依頼を受け、仕事を増やすことができる。つまり稼ぎを多くすることができる。悪いことや恨みごとを語って仕事を増やしているユタ（ムヌスンマ）もいる。私は頼まれて祈願をしているのだから、悪いことがあってもそれは言わずに、いいことを言うようにしている。

亡くなったオバさんへの祈願を頼まれたユタが祈願の最中、オバさんの家族に「自分（オバさん）のバックガマがどこそこにあるから取ってきなさい」と言うのを聞いた。私はすぐに「あれのことだ」と気がついたが、ユタにはそれが何のことなのかわからなかったようである。そのユタは佐良浜で生まれても現在は那覇で暮らしており、またツカサンマを務めたこともないので、ツカサンマ（を務めたオバサン）がどのようなものを持っているのかわからなかったのであろう。ユタは「（オバさんが）バックガマを持っておいでと言っている。どこそこにあると言っている。あんたたち、わかるでしょう」とその家の嫁に言うので、嫁は財布を持ってきた。嫁が「これか」と言うと、ユタは「それだ」と言った。本当はオヤマブクロといって、ツカサンマがキセルやタバコを入れて持ち歩く袋のことを言っているのだが、ユタは嫁が持ってきた財布をそれだと言って祈願を続けた。人がやっていることだから、私は何も言わなかった。

次の日、私はその家に電話して「ユタはまだいるか」と聞いたら、「もう帰った」ということであった。そこで「昨日あなたたちのお母さん（死亡したオバさん）が言っていたのはオヤマブクロのことだから、それを持ってきて供えてあげなさい。ツカサンマが使う簪や着物などもあるだろうから、それらも納骨のときに花と一緒に燃やしてもいいし、形見としてもらっておいてもいい」と伝えた。ツカサンマはオヤマブクロというのを持っているから、シマ（佐良浜）の人なら感づくのだけれども、昨日のユタは、まわりからは「すごいユタだ」と言われていたが、ツカサンマがどのようなことをして、どのようなものを持っているかわかわず、嫁が財布を持ってきたら「それだ」と言っていた。嫁がそのユタを連れてきたということである。

(5) ムヌスンマ

家での祈願を行なうムヌスンマのなかに、いいムヌスンマとそうでないムヌスンマとがいる。インチキだというのは見てすぐわかる。祈願にはいろいろあるが、素人のムヌスンマはどれも同じ言葉、同じ唱え文句で行なう。頼まれて家での祈願を行なう人は佐良浜で、インチキも含めたら30人くらいいる。1回の祈願でお賽銭（謝礼）として2000～3000円受け取る。インチキだとわかっていても、友人とか親戚とかのつながりがあるので、その人に頼まないとならないことも多い。

佐良浜には30数人のムヌスンマ（家での神への祈願をする女性）がいるが、そのなかにはツカサンマを務めた人もおり、そうでない人もいる。言葉や歌、唱え文句を勉強してムヌスンマとして活動している人もいる。このような人は祈願のやり方が私と全然違うので相手にしない。

家での神への祈願も70歳くらいまでは若いからまだできるが、80歳手前になるとできなくなる。年をとった人は、私が聞いていてもチャランポランな言葉、文句で祈願を行なっている。あまり年をとった人には祈願をさせない方がいい。必要な言葉を言うべきところで言わなかったり、別のところで言ったり、唱えるべき言葉や文句を唱えなかったりする。

(6) 相談事

私のところに那覇にいる人から相談がくる。わざわざ那覇からくるのは、娘が那覇で働いており、その働いている所に年寄りたちが集まってきていろいろ話をするうちに、娘から私のことを聞いて電話してくる。電話で話を聞いただけで、電話をしてきた人やその家の状況、その場所の風景が私の頭に浮かんでくる。相談者の家や相談にかかわる場所からの電話でないと、空気が伝わってこないというか、状況を受け取ることができない。必ず相談事と関係のある場所に行って電話してごらんと言う。

那覇に住む女性から、「昔から墓があった場所の横に道路が造られ、墓が道路沿いに位置するようになった。先祖が喧しいと思っているだろうから、墓を移動するのは如何か。墓を移動すると、その跡地が広いので、そこにアパートを建てようと思うが如何か」という相談があった。私は「お坊さんでも何でも連れてきて、先祖に静かなところに連れていくと伝えてから別の土地に墓を移動し、移動した後さら地にする前にその土地を清めるように」と言った。さらに「あなたたちのためにゴテンポーを唄ってあげるよ」と言って唄うと、電話口の女性は「ありがたい」と言って泣いていた。アパートを建てる前に地鎮祭をするとき、もう1回電話してくるように伝えた。「そのときにはカンナヤギという歌を唄ってあげるので、少し時間が長くなるけれど聞いてほしい」と言うと、女性は「わかりました」と答えた。

悪いことが続くという女性から電話で相談がきたこともある。電話で話を聞いていると、近くに松の木があるようなので、その根元あたりはどうなっているか尋ねた。「そこは、もとは先祖の墓であったが、現在ではほったらかしにしてある」と言うので、「先祖の供養をしてあげないといけない」という話になった。また、墓があるという場所の西と東の両方ともに無縁仏の墓があり、それらも何かしてほしいようだから、「1月16日とお盆に、これだけだよ、もうこれだけしかないよと言って供養してあげれば、あなたたちの気持ちもおさまるし、よくなっていくから」と教えた。

そのほか、私の姪から教えてもらったという那覇に住む女性が「子供の命が長くなさそうだが、どうしたらよいか」と電話してきたことがある。「どこから電話しているか」と尋ねると「職場からだ」と言うので、「家に帰って電話するように」と言った。家からの電話を受けとると、「近くに崖があって、その向こうには海も見えているが、その崖に水の湧いているところがあるはずだから、よく探してごらん」と伝えた。その女性は「以前はあったかもしれないが、最近ではその辺りは踏みつけられてあるばかりで、水が湧いているかどうかわからない」と言うので、「どこそこの方向にあるはずだから行ってみてごらん」と伝えた。その女性が電話をしながら探すと、「水が湧いているところがあった」と言うので、「そこをきれいに清めなさい。そこを清めて、毎月1日と15日にお神酒と塩を供えるように」と伝えた。数か月後その女性がまた、「医者が子供は今晩が峠かもしれないというが、どうしたらよいか」と電話してきた。私は「その湧き水はもうある程度きれいになっているだろうから、その水を飲ませるのが一番いいが、飲めとは言わないから、その水でタオルを濡らして、子供の身体を上から下まで拭いて清めてあげなさい」と伝えた。また電話があって「子供は元気になり、医者もどういうわけで元気になったのかねと不思議がっている」ということであった。

(7) 霊能

命が長くない人の目を見ると、目の黒い玉がまったくない。私のことを知っている人のなかには、私がじっと何か見ていたりすると、「また何を見ているのか、こっちを見るな」と言う人もいる。

亡くなる人は、私の家の前の道から私の名前を呼んだり、カカラ（カカランマの略称）と呼んだりして通り過ぎていく。そのような声が聞こえる。カカラと呼んでいく人はすぐに死ぬ。ただワーと叫んでいく人もすぐ死ぬ。病気をしていなくても事故などで死ぬ。病気をしている人はゆっくりと私のことを呼んでいくので、この人は病気をしているとわかる。これらの人は助けられない。人と話をしていても「この人はどうであろうか」と思うときがあるが、当人には告げないこともある。

畑で仕事をしていても乗り物に乗っていても、死んだ人から声をかけられることがある。「ああ、うるさい。あんたとしゃべっている暇はない。忙しい」と答え、時には「うるさい。この馬鹿」と言うときもある。乗り物に乗っているときなどは、それを聞いて一緒に乗っている人が驚くので、「あなたのことではないよ」と言う。外を歩いていても声が聞こえたら、馬鹿みたいに騒いで独り言を言うので、カミゴトをする人、ムヌスンマなどは傍から見ると馬鹿のようにみえる。

最近は夢を見るのもコントロールできるようになった。夢が幾晩も続くことがあり、続きを見たいと思ったら見ることもできる。しかしもう難儀だから見ようとも思わない。「もっとわかりやすい夢を見せてほしい」と告げる。

(8) 霊能の継承

私には子供が5人いるが、そのうち三男が何か見える能力をもっているようである。例えば現在三男は東京にいるが、「オジイのことを知っているか。オジイが自分の面倒をみろと言っている」と電話してきたことがある。オジイは現在施設に入っているが、そのオジイの様子や言動が見えるようである。小さい頃から変わった子ではあった。車を運転していても「何々が見える」などと言ってわき見をするときがあった。そのようなとき私が同乗していると「わき見をするな」と言ったものである。

孫にもそのような何かが見える能力をもった男の子がいる。娘の子だが、「何々が家にいるよ、オバア」などと言うときがある。この孫については、私も悪いことをしたという思いがある。娘にその子が生まれるとき、私は夢を見た。宮大工か宮司のような白装束を着た人が川をくだってきて、「匠という字を入れたこれこれの名前を子供につけなさい」と言った。その夢を見た後、娘に「子供の名前はどうするのか」と尋ねると、「迷っている」と言うので、夢で教えられた名前を伝え、娘もその名前を子につけた。そのようにしたら、この孫が何か神にかかわることが見えるようである。外で遊んでいた孫の姿が急に見えなくなることがある。そのようなとき墓に行って遊んでいたりする。

(9) 家族への祈願

他人のことを見ていると、自分の家族のことが弱くなる。見る余裕がなくなる。だから他人の祈願は、あまり沢山はしないようにしている。あまり他の人のことにかかわっていると、今自分の家庭で誰が弱くなっているのかわからなくなる。私は自分の家族にも直接は言わないが、「大丈夫かね」と家族の様子を見ている。最近、夫の様子が気になり「大丈夫かね」と思って見ていた。「今年はダメかね、病気かね」と思っていたが、本人は弱らないで、トラクターが故障してしまった。「あっ、トラクターに行ったのだ」と思った。

子供たちのことは常に頭において、どこそこに住んでいる誰々はどのようにしているか、忘れないように頭に入れている。「誰々が弱そうだ」となると、その子のために祈願をしている。

(10) ツヅヌカン

シマ（佐良浜）の人は皆ツヅヌカンをもっている。しかし自分のツヅヌカンが何かわかる人もいれば、わからない人もいる。

私と同期でツカサンマを務めた人は、ナナムイが自分のツヅヌカンだと言っている。彼女はツカサンマになって2年くらいしてナナムイで水晶玉をもらったと言っている。同期のツカサンマは6人いても、ツヅヌカンを見るのはそのなかの何人かであり、皆がわかるというのではない。「自分のツヅヌカンはああだ、こうだ」という人もいるが、ツヅヌカンを経験しない人もいる。

私のツヅヌカンはウィラ[12]である。ツカサンマの任期を終える頃、クライアガリ（ツカサンマの任期を終えること）をしてもウィラを拝んだ方がよいという夢を見た。そこでウィラにお礼のブンを持っていき（お礼の祈願をする）、そのときツヅヌカンを受けてきた。それ以前にもウィラの夢を見て、草履を3足もらったことがある。「2足の草鞋」ならぬ「3足の草鞋」ということなのであろう。だから私は踊りもやり、ムヌスンマもやり、ツカサンマもやってミャークヅツ[13]での踊りもする。ウィラは水の神、琉球の水の神である。あるときウィラの場所に立って下の海を見ると、蛇が海水をまき散らしていた。そのようなときは大漁であった。

（11）ムヌスンマの継承

家での祈願（ヤーキニガイ）はいつの時代でも必要なものであるが、現在依頼されて祈願を行なっている人も、年をとって身体が弱くなっていくと祈願ができなくなる。そこで私は、オットンマ（ツカサンマを努めたことのある後輩）たちに「将来やらないといけないから、今のうちに祈願のやり方を覚えておくように」と勧めている。

ツカサンマの経験がない人でも、神への祈願の仕方を習いたいと言ってくる人がいる。このような人のなかには、神にかかわる夢を見る人もいる。自分から神への祈願を習いたいと言う人は、自分の家で行なうために習い始めるのが大部分である。自分も仕事があり、ムヌスンマに頼むと仕事を休まなければならないため、そう簡単には頼めない。自分で行なうのが便利なので、神への祈願の仕方を習いたいという人が大部分である。

神への祈願を習いたいという人には、「最初は自分の家で、年の始めの願い、健康願い、お礼の願いの3つさえ行なえばいい。そのうち兄弟の家でもやってあげたいと思ったらやってあげて、そのように勉強しているうちに自然と覚えてくる。そうすれば人も頼みにくるようになるから、勉強しておきなさい」と言っている。そのように言うと、習いたいという人たちは「お願いします」と言うので、歌や線香の供え方など祈願の仕方を記した私のノートを貸して、それを書き写させ、書き写し終わったら私に返すようにさせている。もしくは私がいくつかの歌を紙に書き写して、渡したりもしている。

3．若干の考察

以上、佐良浜で集落の祭事を担当する女性宗教者ツカサンマを務めたAが語る体験談を紹介した。Aが語る内容すなわちツカサンマに選ばれる以前の体験、ツカサンマの任期を終えた後に行なっている個人的な相談事への対応や各家での神への祈願の様子から、本稿のはじめに紹介した先学が指摘する、神霊と直接交流する能力をもち、集落の祭事を担当するノロ（佐良浜ではツカサンマ）の役割を終えた後、個人からの相談事に霊能をもって応じ、個人の家での神への祈願を行なう宗教者の姿を確認することができる。

さらにAの体験談には、これまでのノロ（ツカサンマ）やユタ（ムヌスンマ）に関する研究と関連して注目されるいくつかの内容も含まれている。例えば成巫過程（ユタ、ムヌスンマになる過程）の問題と関連して、Aが「私はカンダーラになるところまではいかなかった」と語っていること、また巫儀（ユタ、ムヌスンマが行なう儀礼）を実施する技能の獲得の問題と関連して、「オットンマ（後輩のツカサンマ経験者）に、今のうちから家での祈願のやり方を覚えておくように勧めている」とか「家での神への祈願の仕方を習いたいという人は、自分の家で行なうために習い始める」などと語っていることなどが注目される。

ここではこれらの点を取りあげ、若干の考察を試みる。

（1）成巫過程

Aは先に紹介したように、カンダーラ（カミダーリィ、カンブリ）を経験しなかったと語っている。カンダーラ、カミダーリィ、カンブリとは神から与えられる心身の異常、不調であり、具体的には幻覚、幻聴、不眠、食欲不振、夢遊歩行などの症状として発生する。それらは神からの召命のしるしとされ、カミダーリィになった者は自分を召命した神を受け入れてユタ（ムヌスンマ）になる。ただし、いずれの神が自分を召命したのかはすぐにはわからず、神が祀られているウタキ（御嶽）などとよばれる場所を巡り歩いて、自分が仕える神を探し出さなければならない。自分が仕える神を探し出すのについやす期間は人によって異なり、数週間、数か月で探し出す者がいる一方、数年かかる者もいる〔滝口 1991:152-153;池上 1999:338-340〕。

先学は宮古群島のノロ（先学は神役と表記する）について、多くのノロがカミダーリィに類似するプロセスを踏んでいるとみられると指摘する。そして、ノロはクジによって選出されるが、ノロたちにはその選出を避けられない神からの召命とする意識が強く、したがってユタ（先学は民間巫者と表記する）と

[12] ナナムイ（大主神社）とは別の場所にあるウタキ（御嶽）に祀られている神〔平良市史編さん委員会 1994:584〕。
[13] 旧暦9月の甲午の日から4日間、佐良浜の老若男女をあげて盛大に行なわれる祭り〔伊良部村役場 1978:1402〕。

ノロの成巫過程の差は「奉祀する神が判明しているか否かの差ともいいかえることができるかもしれない」と述べている〔佐々木伸一 1988:163〕。

これまでの研究成果によれば、一般的にユタの成巫過程には、生まれながら霊的な能力を所有する者として幼少より常人とは異なる体験をする、カミダーリィとみなされる心身の異常や不調を経験する、自分を召命した神を探し出す、などが一連の状況として見られることが指摘されている。これらのことについて、A の場合を考察してみる。

A はツカサンマに選ばれる以前から先の体験談で紹介したように、誰かが死亡することを示す夢や、神から赤ん坊を守るよう伝えられる夢を見ており、A 自身も、自分は「カンダカイ（神高い）生まれ、シジダカイ（シジ高い）生まれ」と語っている[14]。したがって A は自分を、ユタの成巫過程で指摘されるような、生まれながらにして霊的な能力の所有者であったと意識している。

ただし心身の異常や不調の経験は、A の体験談では語られていない。先述のように心身の異常や不調はカミダーリィとして成巫以前のユタが体験するものとされるが、ここでは A が「私はカンダーラになるところまではいかなかった」と語っていることが注目される。

A が語るところによれば、彼女はツカサンマを務めたことのある先輩たちからアドバイスを受け、習いながら、夢などの自分の霊的な体験を自身で解釈していくことに努めた。その結果、夢や線香の燃え方など通じて神が示してくれる内容を自分で解釈、判断できるようになり、カンダーラ（カミダーリィ）になることなく、自分で道をあけることができたと述べている。そしてカンダーラ（カミダーリィ）になってあちこち巡り歩いて祈願をしている人も、神が示してくれることを自分で判断できるようになっていたら、カンダーラ（カミダーリィ）にならずに自分で道をあけることができたであろうとも述べている。すなわち自ら学ぶことの重要性を語っているのである。

ところで先学によれば、カミダーリィなど心身の異常を経験し、神に選ばれたという自覚をもとに役割を果たすユタを、人びとはウマレ（生まれ）ユタと呼んで畏敬視する一方、カミダーリィ経験を経ずに、知識の習得を意識的に図ってユタとしての行為をする者はナライ（習い）ユタと言われ、蔑視の対象になるという〔佐々木宏幹 1980:100-101;池上 1999:451〕。そして「ユタに、神や祖先のことやハンジ（占い：筆者注）、儀礼の仕方を他のユタに学んだのかと尋ねると、必ず否定的な答えがはね返ってくる。彼らが主張するのは神や精霊が夢や現の間に現われて、直接にいろいろなことを教わったということである。そしてこの経験がウマレユタの自信と誇りの根拠になっているのである」という〔佐々木宏幹 1980:102-103〕。他方ナライユタとは、ユタのところに通っているうちに唱え言、占いや儀礼の仕方などを見よう見まねで学び、一人前のユタであると称して依頼者に応じる者のこととされる〔佐々木宏幹 1980:101〕。

この指摘を参考にして A の場合を考察すると、A は自身をカン高い生まれ、シジ高い生まれであると語っており、生まれながらにして神とかかわる能力をもっていると自らみなしている。すなわち A はウマレユタの要素をもっていて、周囲の人びとも A の霊的能力の高さを認めている[15]。

他方 A は先輩ツカサンマから学び、習うことも重視している。先輩たちから学び、習うことによって神が示してくれることを自分で判断できるようになり、そのためカミダーリィで苦しむことはなかったと述べている。またツカサンマを務めた際に習得した歌や唱え言、神に関する知識に加えて、A と同様にツカサンマの任期を終えた後に家での祈願を行なっている先輩と一緒に家での祈願を行ないながら、家での祈願に必要な知識や儀礼の行ない方を学んでいる[16]。このようにカミダーリィを経験せず、先輩のやり方を学んで活動する A であるが、周囲の人びとは彼女を「昔ながらの祈願」ができる者と評価しており、ナライユタといわれる者のように蔑視されることはない。A は、生まれながら神とかかわる能力をもち、また学習を重視して「昔ながらの祈願」を行なう者と評価されている宗教者といえる。

先述のようにウマレユタは占いや儀礼の仕方を神から直接教わったと主張し、このことがウマレユタの自信と誇りの根拠になっているとされるが、学習の重要さを主張する A の自信と誇りの根拠になっているのは、ツカサンマを務めた経験と、その際に習得した知識、技能と考えられる[17]。そしてこのような A に対する周囲の人びとの評価は高い。

このような A がもつ自信と誇り、そして彼女に対する人びとの高い評価の背景には、佐良浜の人びとによって認知されているツカサンマという宗教者に対する位相の高さにあると考えられる。佐良浜の人びとは、宗教者としてはツカサンマがムヌス

[14] 「カン（神）高い生まれ」「シジ高い生まれ」とは、神とかかわる能力をもって生まれてきた者を表す語として使用される。なお本稿で紹介した A の体験談は、平成 30 年 6 月までの調査で得られた内容から整理したものであるが、筆者が、A が自身を「カン高い生まれ、シジ高い生まれ」と述べるのを聞いたのは平成 30 年 11 月の調査のときであった。平成 30 年 11 月以降に行なった調査の成果については、あらためて報告する予定である。

[15] ムヌスンマが行なう儀礼のうち、葬儀などの際に、死者の言いたいことをムヌスンマが代弁することをタマスウカビというが、これができるムヌスンマは少ない。佐良浜の人びとのなかには、A は将来タマスウカビもできるようになるとみる者もいる〔川上 2016:19-20〕。

[16] 平成 30 年 11 月の調査でも、このような話を聞いた。

[17] なお A は、神が夢に現れて集落の祭事の行ない方の誤りなどを指摘してくれたなどとも述べており（平成30年11月の調査）、神から直接教えを受けた経験も主張する。

ンマよりも上位にあると認識している。ツカサンマはクジで選ばれるが、ツカサンマに選ばれることなくムヌスンマとして活動している者のなかには、「ツカサンマに選ばれたかったのに選ばれなかった」、「自分が選ばれるべきであった」と話す者もいるということを佐良浜で聞いた[18]。ムヌスンマたちのなかにも、ツカサンマを経験者した者の宗教的な優位さを認める考えがあるようである。

このように佐良浜では、ツカサンマを務めた経験から得たものや、先輩ツカサンマから学んだものをもとにして儀礼を実施している宗教者は、蔑視の対象ではなく、むしろ高く評価されている。学習、知識の習得が宗教者に対する蔑視の理由にならないのは、佐良浜では集落の祭事を担当する宗教者ツカサンマを高く評価するという「文化の影響力または規制力がきわめて強く、また社会がこれを大勢として支持しているという状況」〔佐々木宏幹 1980:126〕があるためといえるのではなかろうか。

なお、宮古群島のノロとユタの成巫過程を比較した先学が、両者の成巫過程の差は「奉祀する神が判明しているか否かの差といいかえることができるかもしれない」と指摘していることは先述した。A は自分のツヅヌカンはウィラの神であると語っていた。集落の祭事を担当するツカサンマはナナムイ（大主神社）をはじめとする各ウタキ（御嶽）の神を奉祀し、ウィラもそのウタキ（御嶽）の神の一つであるが、A の語りからすると、ツヅヌカンというのは各人の守護神、各人が奉祀する個別の神を意味するとみられ、集落祭事の担当者としてツカサンマが奉祀する各ウタキ（御嶽）の神々とは性格が異なるもののようである。

A が個人的に奉祀する神すなわちツヅヌカンはウィラという神であり、ツカサンマを務めている間にウィラの神が自分の奉祀する神として判明したという。A の語りによれば、ツカサンマのなかには自分のツヅヌカンを見出さない者もいるという。個人的な守護神を探し出さなければならないのはユタ（ムヌスンマ）と同様のようであるが、個人的に奉祀する神はツカサンマを務めている期間中に判明するようである。

（2）巫儀を実施する能力の獲得

以上のように A は学習の重要性を主張しているが、後輩たちにも家での神への祈願のやり方を学ぶように勧めている。すなわち学習による宗教者の育成を主張しているといえる。

すでに述べたように佐良浜では、個人的な依頼事や各家での神への祈願をする女性宗教者をムヌスンマとよぶが、果たす役割の違いによって、ムヌスンマにはアクス・ムヌスンマとニガイ・ムヌスンマという 2 つの範疇があるともされる。前者は霊的な能力を使って占いなどを行なう者であり、アクスとは「明かす」の意と考えられる。後者は家でのニガイ（祈願）を行なう者である。両方の役割を共に果たすムヌスンマもいる〔川上 2016:19〕。調査がさらに必要であるが、佐良浜の人びとはアクス・ムヌスンマをニガイ・ムヌスンマよりも上位にみているようである。

また、ムヌスンマというよび方の他に、家での祈願を行う女性宗教者はカンニガイオバアともよばれる。カン（神）へのニガイ（祈願）をするオバア（老女）は誰でもカンニガイオバアとよばれるので、ムヌスンマもカンニガイオバアである〔川上 2016:19-21〕。ただし佐良浜の人びとはムヌスンマを、生まれながら神とかかわる能力、神が示すことを受け取る能力をもっている宗教者とみなしており、同じく家での神への祈願をする宗教者であっても、生まれながら神とかかわる能力をもっているのではなく、祈願の仕方や神に捧げる歌を学んで活動する宗教者、すなわち神とかかわる能力のないカンニガイオバアとは異なる存在と意識している。いいかえれば、生まれながら神とかかわる能力をもっているのではなく、祈願の仕方や神に捧げる歌を学んで活動する宗教者はカンニガイオバアではあるが、ムヌスンマではない。

このような佐良浜の人びとがもつ宗教者に関する分類を確認した上で、A が後輩たちに家での神への祈願の仕方を学ぶように勧めたり、自ら神への祈願ができるようになること望む人々にやり方を教えたりしていることについて考えてみたい。

宗教者に家での祈願を依頼している佐良浜の女性が、これまで依頼してきた宗教者たちが高齢になって体力的にも衰え、祈願のできる人はもう佐良浜にはいなくなるのではないかと思われても、必ず次の世代の宗教者が現われてくると話すのを聞いた。この新たに登場する宗教者には、生まれながら霊的能力を所有する者（ムヌスンマ）もいるであろうが、A の語りから、学習によって活動する者（ムヌスンマには含まれないカンニガイオバア）もいるであろうことがわかる[19]。

このように学習によって宗教者になる人には、A のようなツカサンマ経験者もいるが、ツカサンマの経験がない人でも、自分の家で行ないたいので神に捧げる歌や祈願の仕方を覚えたいという者もいるということである。そのような人に A は、祈願の際に唄う歌や唱えごと、線香の供え方など祈願の仕方を自ら記したノートを渡したり、必要な歌を紙に書いて渡したりして教えている。

A に家での神への祈願の仕方を教わる女性たち、特にツカサ

[18] 平成 30 年 11 月の調査。

[19] ムヌスンマには含まれないカンニガイオバアは、佐良浜でのナライユタといえるかもしれない。しかし A に家での祈願の仕方を教わりに来る人のなかには、神の夢を見たりするなど、神とかかわる何らかの体験をしている人もいるようであり、ムヌスンマとカンニガイオバアとの境界には曖昧さが残る。

ンマの経験のない女性たち、すなわちムヌスンマに含まれないカンニガイオバアになる人々は、佐良浜でのいわゆるナライユタの範疇に入るかもしれず、宗教者としての評価は低いことも予想される。

しかしAが、家での祈願ができるようなることを希望する人びとに、祈願の際に唄う歌や唱えごとを記したノートを貸したり、自ら書き写して与えたりしていることに注目するならば、そこに祈願の際に唄われる歌や唱えごとを存続、継承する役割を見てとることができるかもしれない。

家での神への祈願を行なう宗教者のなかには、神に捧げる歌や唱えごとを自己流に、あるいは適当に、あるいは出鱈目に行なう者もいるという。佐良浜の一般の人びとでも神への祈願を何回も見てきた者は、唄うべきときに唄う歌、唱えるべきときに唱える言葉や神の名を理解している。そのような人びとは自己流、適当、出鱈目な宗教者かそうでないか、祈願を見て判断できる。Aが「昔ながらの祈願をする」と評価されるのは、ツカサンマを務めたときに覚えた歌や唱えごと、神々の名、Aと同様にツカサンマを終えた後に家での祈願を行なっている先輩から学んだ歌や唱えごとを用いて活動しているからであろう。Aはそれらの歌、唱えごと、祈願の仕方をノートに記しており、家での祈願ができるようなることを希望する者には、そのノートを貸したり、自ら書き写して与えたりしている。先学は沖縄本島での事例であるが、ノートに書き留めることが神に捧げる歌の継承には重要である旨指摘している〔高梨 2002:37-55〕。Aが神に捧げる歌や唱えごと、儀礼の仕方などをノートに記し、そのノートを使って後輩に学習させていることは、儀礼における歌や唱えごとの継承の役割を果たしているといえるのではなかろうか。

4．おわりに

本稿では、宮古群島において集落祭事を担当する宗教者の務めを終えた後、個人的な相談事や家での神への祈願に応じている宗教者の事例として、佐良浜で活動するAの事例を報告した。やや詳細に事例を報告したのは、このような宗教者に関する事例報告がこれまであまりなされてこなかったのではないかと考えられ、佐良浜さらには宮古群島における民俗宗教を総体的にとらえようとする場合の資料となり得るのではないかと考えたからである。

Aに関する事例報告を通じて、カミダーリィを経験しなくても神が示すことを解釈、判断できるようになったと主張する宗教者が存在することを確認した。また、家での神への祈願を自ら実施することを希望する者に対して、Aが神への歌や唱えごとなどを自分で記したノートを貸したり、歌を紙に記して渡したりしているのは、神への歌や唱えごとの存続、継承に貢献しているといえるのではなかろうかということも指摘した。

最後に、本稿で検討した上記の2点と関連させて、佐良浜での民俗宗教を総体的に明らかにしようとする場合の今後の課題について述べてみたい。

まず本稿では、カミダーリィを経験することなく、先輩たちから学んで神が示してくれることを自分で解釈、判断できるようになるのが重要であると主張するAが佐良浜で評価されるムヌスンマとして活動しているのは、佐良浜の人びとのツカサンマに対する評価の高さにあると考えられることを指摘した。これは集落祭事を担当する宗教者ツカサンマに対する評価が、佐良浜という地域社会の内部で依然として高いことによるものである。

ただしツカサンマへの高い評価が今後も続くのかは、様子をみる必要がある。近年ツカサンマへの就任を拒否する人びとが現れ、ツカサンマが不在の状況が続いている〔川上 2017:47-48〕。このことは、集落の祭事やそれを担当するツカサンマへの評価、重要性の認知が人びとの間で低下していることをあらわすものとも考えられる。一方ツカサンマの選出を再開して、集落の祭事を継続していこうとする人びともいる。ツカサンマの選出が再開され、集落の祭事が継続されえるのか、関心がもたれる。

また、佐良浜の外からやってくる宗教者の影響が今後どうなるかも注目される。Aの語りには、佐良浜の出身ではあるが那覇で生活しており、依頼されて佐良浜で死者への祈願を行なったユタのことが語られていた。Aはそのユタが行なう祈願の仕方に批判的で、ユタが那覇に帰った後、遺族に対して死者の意向に関するAの考えを伝えていた。佐良浜の外から入ってくる宗教者が今後佐良浜にどのような影響を与えていくのか、この点も注目すべきことであろう。

次に、Aがノートに神に捧げる歌や唱えごとを記して、それを使って後輩に教えていることが歌や唱えごとを伝承する役割になっているのではないかという点と関連して、佐良浜で伝えられてきた神に捧げる歌や唱えごとは、家での祈願で行なわれるものだけではなく、ツカサンマだけが唄うものがある。これらの伝承はどうなるのかという懸念がある。

佐良浜で祭事に唄われる歌にはオヨシ、カミウタ（神歌）、祝いの歌（新築、米寿、古希、子供の誕生などのときに唄われる）がある。このうちムヌスンマが家での祈願などで唄うのはカミウタ（神歌）と祝いの歌である。オヨシはツカサンマが集落での祭事のときにだけ唄うものであり、ツカサンマしか知らないものである。カミウタ（神歌）と祝いの歌はムヌスンマが習うことによって継承されるが、オヨシは新たにツカサンマが選ばれない限り継承されない。佐良浜では現在ツカサンマの選出が中断しており、それによるオヨシの伝承の中断も懸念される。

そのようななか近年、ツカサンマを務めた者たちによって公

演としてオヨシが唄われることもある〔川上 2017〕。一方それだけでオヨシが残されていくかとなると疑問も残る。公演する機会がなければオヨシは唄われない。A はオヨシもノートに書き留めているが、ツカサンマ以外にそれを伝えることもないであろう。家での祈願の際に唄われるカミウタ（神歌）や祝いの歌は伝承される一方、ツカサンマが今後も選ばれなければ、集落祭事のときにだけ唄われるオヨシの伝承は中断する可能性もある。今後のツカサンマの選出が注目される。

謝辞

今回の調査でも仲間明典先生と奥様、與儀千代美さん、長崎国枝さん、上原敏美さんをはじめ、佐良浜の方々にお世話になりました。感謝申しあげます。なお本稿の文責はすべて筆者にあります。

引用文献

池上良正 1999 『民間巫者信仰の研究』未来社
伊良部村役場 1978 『伊良部村史』
岡本恵昭 1987 「第五章　信仰」平良市史編さん委員会編『平良市史第七巻資料編 5　民俗・民謡』平良市教育委員会
鎌田久子 1965a 「宮古島の祭祀組織」東京都立大学沖縄調査委員会編『沖縄の社会と宗教』平凡社
1965b 「日本巫女史の一節」『成城大学文芸学部創立十周年記念論文集』成城大学文芸学部・短期大学部
1971 「宮古島諸部落の神役名称」『日本民俗学』78
川上新二 2016「沖縄・伊良部島佐良浜の宗教職能者―祭司とシャーマンの関係について―」『岐阜市立女子短期大学紀要』第 65 輯
2017 「公演として唄われる神歌―沖縄・伊良部島佐良浜の事例―」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第 66 輯
櫻井徳太郎 1987『東アジアの民俗宗教』(櫻井徳太郎著作集 7) 吉川弘文館
佐々木宏幹 1980 『シャーマニズム』（中公新書）中央公論社
1984 『シャーマニズムの人類学』弘文堂
佐々木伸一 1983 「宮古島の民間巫者と神役―その重層性と分化―」北見俊夫研究代表『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリャー等）の機能的整理と民俗変容の調査研究』昭和 57 年度科学研究費補助金（総合 A）研究成果報告書
1988 「カンカカリー達―宮古島その他のシャーマン的宗教者―」北見俊夫編『日本民俗学の展開―筑波大学創立十周年記念民俗学論集―』雄山閣出版
高梨一美 2002 『沖縄の女性祭司の世界』東横学園女子短期大学女性文化研究所叢書第 10 輯
滝口直子 1991 『宮古島シャーマンの世界』名著出版
野口武徳 1972 「宮古群島―池間島の事例を中心に―」日本民族学会編集『沖縄の民族学的研究―民俗社会と世界像―』財団法人民族学振興会
饒平名建爾 1973 「シャーマニズムの考察―宮古・伊良部村佐良浜の事例から―」『流大史学』4
1976 「霊的職能者と部落―宮古郡伊良部村佐良浜部落―」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄―自然・文化・社会―』弘文堂
平良市市史編さん委員会 1994 『平良市史第 9 巻資料編 7（御嶽編）』平良市教育委員会

（提出日　平成 31 年 1 月 8 日）